

平成二十年度「花のまわりみち」

定本 広文 選

川柳入選句

〔天地人・秀逸〕

「天位」

着飾って行っても桜には負ける

松岡 登代子

（評）美しい桜が、それぞれのスタイルで並ぶ「花のまわりみち」。  
この句は、気楽な服装で花を楽しむ姿を、うまく引き出した。明るい  
心にふさわしい句。

「地位」

哀歡はそつと一葉胸に秘め

楠山 東石子

（評）今年の花として、みんなが興味を持ったせいも、句材としては一番多  
かった。花の名にある由来や、満開の時は白い色という変化が、作者  
の思いを深めた。

「人位」

まわり道ゆるゆる後期高齢者

酒井 厚（水鳥）

（評）まとまった場所で、品種も桜の数も多い名所。  
見落としのないように、急がない姿に、時代語を重ねた対比が、句の  
後半で生かされた。

「秀逸」(五句)

連れ合いが美人に見えて花の道

河村 幸子

(評) きれいな桜の中で、連れ合いまでがみな美しい。

そう見えたのではなくて、実感句として納得できそうだ。

楚々とした花一葉がふとタフリ

吉川 徳子

(評) 大勢の数でも一人ひとりに、それぞれの思いがある。

花に寄せる思いとイメージを、下五で深いものにした。

祝福のエールを交わす花回路

大河 遊歩

(評) エールとはこの句の場合、好意のこもった激励と見たい。

見る側と見られる花。この触れ合いが、深い交流を暗示した。

いたずらな風に踊らされた桜

川上 咲良

(評) せっかく咲いても花の生涯は、長いとは言えない。

風に散る風情も悪くはないが、踊るとは花を愛する表現の一つ。

白無垢の花弁一葉包み込む

松井 哲夫(福朗)

(評) 花を愛する心の拡大判とでも言うことが。

桜樹一覽から特徴を見直しても、句のねらいが分かる。

視点を移した花への愛情。

佳作

(二十五句)

一葉の前で決まらぬ立ち姿

森本 陽子

御衣黄という生き方よ花の道

山下 天平

背伸びして下から仰ぐ八重桜

樋田 緑(翠)

一葉のもてなしに酔う花の道

岩崎 史子(実知)

万花背にエバヤマザクラ葉で勝負

大野 順子

時をかえ日をかえみたい八重桜

後藤 孝子

花もまた人見比べるまわり道

鈴木 博子(ひろこ)

一葉を上げば欲しくなる絵筆

井上 イツコ(イツコ)

普賢象重さのあまり下につく

富田 花

関山がささえたくなる花のかず

松前 京子

見事です手入れ精出す影が添う

外間 正枝

地に咲いて天まで届け天の川

油目 博子(ひろ)

千の風吹いて見せてよ花吹雪

竹本 君代

どの顔も花にとけゆくまわり道

湯村 治子(はる子)

思川数ある花に足を止め

江村 星

七重八重後期の櫻一葉花

松前 道英（漏月）

花ざかり人もまけじとさくらみる

伊藤 ユリ子

見上げてる子供が笑う紅手毬

沖本 京子

枝一杯笑顔明るい紅手まり

萩原 秀行（天然水）

関山に舞姿あり花の道

屋敷 陽子

まりの様こんもり咲いて桜色

大浜 和子

夢叶い息子の肩に福祿寿

山本 美代子

関山の枝を広げて見せる花

吉川 美佐子

花のみち口だけ元気三姉妹

渡 ユキミ

遠くから来てよかったね花のみち

高橋 英子（英）

選者吟

定本 広文

まだ名前ない一本が負けず咲く